

---

# 春菓愁糖

ゴキポン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春菓愁糖

### 【Nコード】

N5442N

### 【作者名】

ゴキポン

### 【あらすじ】

私立美紗姫学園へ入学した少女白井真子。初めて出会った友達と一緒に部活見学をするとき、真子は「製菓部」という部活を目にする。

その部室で一人で黙々と部活動をする男子の先輩を見た真子は恋に落ちた。次の日の放課後、製菓部へ入部することを決意するが。

## プロローグ 私の学園生活はここから始まる(前書き)

お久しぶりですゴキポンです！夏休みはいかがお過ごしでしたか？最近は大変暑い残暑で私は毎日家で過ごしてばかりでしたwww暑いといえはやっぱり恋ですよねえ。ということで本日から始める新連載は初回版として本日のみプロローグと第一話を連続投稿させていただきます！

では、どうぞご覧下さいませ！！

## プロローグ 私の学園生活はここから始まる

私は高校に入学してすぐに部活に入ることを決心したが、私が想像していたのより遥かに違っていた。入部早々ドタバタして、もうクタクタ。ほとんどの部活は一年から入部すれば一から先輩に教えてもらえるはずなのだが、入部していきなり雑<sup>じやく</sup>遙<sup>じやく</sup>扱<sup>じやく</sup>いだ。まるでどこかのヤンキーが弱い者にパン買って来させたり、掃除当番を全部やらせたりなどされている雑用係だ。

私は大量のプリントを抱えて走ってはいけない廊下を走った。

「ハアハア」

「コラア、廊下を走るな！」

先生の怒鳴り声もまるで聞こえていないかのように走り続けた。

私が抱えているプリントには「製菓部 緊急！新入部員大募集！」と書かれてある。そう、私が入ったのは製菓部というただ単にスイーツを作るだけの部活である。学校にある全ての学校を見回った結果この部活が私の中では第一希望であり、そして製菓部を所属している先輩を見て入りたくなった。

私は別に料理を作るのは嫌いではない。家ではいつも忙しい母の代わりに晩御飯を作ったり、炊事をしている。元々料理を作ることが嫌いだったのだが、慣れればどうってことはない。

3歳の弟の健太と合わせて4人家族であり、弟の面倒は私が見ている。

ちなみに父はもちろんのこと普通のサラリーマンである。しかし、最近父は仕事でかなりの活躍をしていたため現在部長へと昇進したのだ。

おかげで我が家は昔よりまともな生活をおくっている。

私は部員募集のビラを校門からトイレの隅々まで貼りまくった。

どうして私がこんなに入部したばかりで忙しいかというとても大変な問題を知ってしまったからである。

それは製菓部が廃部されてしまうという危機に陥っているから。

私はビラを貼りながら一人でブツブツと言った。

「　　もう、どうしてなのよ　　」

そして私の独り言はしだいに大きくなり、

「なんでこうなるのよ――――――――――」

――――――！

私の声は学校中に聞こえて生徒達はみんな私に注目した。  
ざわ、ざわ

「あつ、いや　　、その　　」

私は赤面して残ったビラで顔を隠してその場を去った。  
必死で走った。そして、心の中で叫んだ。

（もういや――――――――――！！）

プロローグ 私の学園生活はここから始まる(後書き)

「次の話>>」を押ししてください。

**部活動1 部活に入部 そして部活が廃部!?(前書き)**

引き続き「春菓愁糖」をご覧ください。

## 部活動1 部活に入部

そして部活が廃部!?

桜の木から桜が舞い上がっていて実にいい光景だ。左右を見渡すと桜の木がたくさんあって、一本道になっていて、学校まで桜吹雪で全然見えない。

私は白井真子<sup>しろいまこ</sup>。この春地元<sup>ちごまち</sup>の学校「私立美紗姫学園」に入学した。この学校はととても綺麗で施設も充実しているという理由で希望をした。

「わあ、きれえ」

私は歩きながら桜の景色を眺め続けて、しばらく歩くとやっと校門が見えた。校門に入ると大きな掲示板がありそこには新入生の名前が書かれてあってその隣に出席番号と組もあった。組は番号ではなくアルファベットで1組はA、2組はBというふうになっている。私はD組と名前の隣に書いてあった。さっそく履いているローファア<sup>ローファー</sup>を下駄箱に入れ自分の教室に入る。

教室の中もとても素晴らしいというぐらい綺麗だ。

あ、高校って最高!

私はあまりの感動でついつい踊ってしまう。でも周りには私以外まだ誰も来ていなかったので平気だった。

実は私は女子高生にはすごい憧れがあった。

小学生の頃学校を通学の途中で転んでしまい、あまりにも痛かったので泣き喚いた。

そのとき一人の女性が私の方へ近づいて来て声をかけてきた。

「大丈夫!怪我はない?」

こえをかけてくれたのは女子高生だった。その人は他の友達と一緒に学校へ行く途中で見つけた。

その女性は友達に先に行つてと伝えて、私の方に来たのだ。

「うっ、足が」

「足を怪我をしたのね。ちょっと待っててね」

女性は鞆から救急箱が出し、包帯と消毒液と丸い綿を取り出し怪我をした足を応急処置をしてくれた。

「少し痛いけど我慢してね」

「う、うん」

私は痛みをこらえ、女性は消毒をした後に包帯をきれいに巻いた。

「ハイ、これでもう大丈夫」

さっきまで痛かったのが魔法をかけたかのように痛みが治まったのだ。

「学校の保健委員でバレー部のマネージャーをしているからいつも持っているの」

「わあ、全然痛くない。ありがとうおねえちゃん！」

「どういたしまして、それじゃあ私は学校へ行く途中だからそろそろ行くわね」

女性は私に手を振り、去っていった。

ああ、あのとき最後に名前を聞けばよかった。

それから私は女子高生に憧れたのだ。小学生の頃のことだからとつくにこの学校を卒業をしている。新しい仲間となるクラスメート達も教室に集まり、体育館へ移動して無事始業式が終わった。

入学式の後といたら一人ずつでの自己紹介がなよりの定番でもある。

自分のクラスメートの名前を頭の中で暗記をする。そしてついに私の番が来て、教卓の前に立つ。

「白井真子です。よろしくおねがいます！」

お得意の元気な声で自己紹介をすると、教室中はたくさんの拍手をおくられ私は思わずニコツと自然に笑う。

自分の席に座ると隣にいる子に声を掛けられる。

「白井ちゃんってとても元気なんですねぇ」

「ありがとうよく言われるの」

「あたしは堀川ルミ、よろしくね」

「うん、こちらこそよろしく」

もう新しい友達ができてとても嬉しすぎのあまり思わずまた、クルクルと踊りだす。

私はクラス中の人たちに注目された。

「あ　あの　えっと　」

もはや、口から言葉を吐き出せる状態ではなくて赤面する。

「クスクス白井ちゃんって面白い　」

堀川さんが笑いそれに続きみんなも笑い出し、緊張感があった自己紹介の場の空気が一気に和んだ。

クラスの自己紹介が終わり、放課後に入る。

「ねえ白川ちゃんこのあと一緒に部活見学しない？」

「いいよ、私もちょうど行こうとしたところなの　」

スポーツ系の部活から見学をした。

「あたしスポーツ系はあんまり苦手なんです。白井ちゃんは？」

「中学の時陸上部に入ってたの。いつも体育祭とかでアンカーに選ばれるの　」

「すごいじゃないですか！アンカーに選ばれるということは足が速いということじゃないですか　」

「まあそうなんだけどね　でも、本当は野球やサッカー部に入りたかったんだよね　」

「そっか、その部活のマネージャーにはなれるけど実際にやらせてくれないですもんね　」

私は堀川さんに中学の時のことや今の心情を話し、最後にその部活の様子を見た。

バドミントン部にバレー部、柔道部なども見学したけどなかなかこれとっていいなと思った部活は見つからなかった。堀川さんは体育系より文化系なので一緒にそっちの部活も見学した。

文科系の部活はスポーツ系よりたくさんあり、囲碁・将棋部に放送部などお馴染みの部活以外にここでは珍しい百人一首部や麻雀部などがあった。

「すごいわねえ　。　ねえ、堀川さんはもう入る部活決まってる

の？」

「えっ？えへへ実は、まだ決まっていないう」

堀川さんは自分の頭部を軽く叩き「てへっ」と可愛く見せる。しばらく長い廊下を歩いていると堀川さんはお手洗い行つて来ますと言ひ残して慌てながらトイレに向かった。余程我慢をしていたのだらう。

私は堀川さんがトイレから戻ってくるのを待っていると、なんだから良い匂いがしてきた。とても甘い匂いだった。匂いを頼りに移動すると、目の前には「調理室」と書かれてあった。どうやらこの部屋からとつともなく甘い匂いがする。よく見ると部屋のドアに隙間が開いていた。

入り口のドアに貼つてある張り紙には「製菓部」と書かれてある。製菓部、私にとってはこれもまたとても珍しい部活であると思つた。

どうも気になつてしょうがなかったので、ドアをゆっくりと開けた。

流し台が10ヶ所あつて、お菓子を作るときの調理道具がたくさん置いてある。しかも火をおこすときに使用するガスコンロではなく、電気で動くIHクッキングヒーターであつた。さすがは私立綺麗だけではなく設備も万全である。私にとってIHクッキングヒーターというものは神みみたいな存在だ。買おうとしても数十万かかる代物である。

もう少しここを調べてみようと思ひ調理室に入り探索を始める。するとなにやら音が聞こえ、耳を傾けると水を出す音も聞こえた。そこには、誰かが作業をしていて、部活動をしているだらうと思ひこっそりその人の方へ行くと、なんと一人だけであつた。しかも男子であつた。

私は我を忘れて、男子生徒が集中している様子をずっと眺めていた。

すると、その男子は私がいることに気づきこちらを見た。

「え、えつ　と」

男子の目が合ってしまった、赤面してしまう。

「君、どこのクラスの子かな？」

その男子はとても爽やかな声をしていた。

「い、1年D組の　白井　真子　でしゅ　」

緊張のあまりいつもの元気な声が出なかったうえおまけに噛んでしまった。

「ああ、じゃあ新入生だね」

「は　はい」

一体どうしたということなのだ、いつもの私らしくない。これはもしかしてこの人に惚れてしまったというフラグが立っているのではないだろうか　」

そんなことは有り得ない、私の好きなタイプはスポーツマンオンリーよ。別に彼がイケメンだから赤面したわけじゃないんだからね。「白井ちゃんどうしたんですか？」良いタイミングで堀川さんが来てくれた。

「い、いやなんでもない　。　し、失礼しましたー！」

大急ぎで部屋から出ていき、堀川さんは後を追った。

「どうしたんですか？お顔が真っ赤ですよ」

「そ　そう？おかしいわねえなんだか急に暑くてたまらないわ」

「　？」

堀川さんは首を傾げたが笑って誤魔化した。二人で文科系の部活を見学して1時間経過した。

「どう堀川さん見つかった？」

「いや、今のところはまだです。白井ちゃんは？」

それを聞かれた瞬間心臓がドキッ！？とした。

「わ、わたしもまだかなあ　。　で、でも気になってる部活はあるけど　」

「へえそれはなんですか？」

「　製菓部んですけど」私は弱気で言った。

「製菓部？ああ、白井ちゃんがあの時入ってた部屋ですね。お料理とかするんですか？」

「いつも家事の手伝いをやってて、そのうちに料理が好きになってきたの」

「すごいなああなたは料理はあまり作れないですけどねえ」

そのまま堀川さんとの話が弾み部活入部を後にし、下校をした。帰りの途中堀川さんと別れて一人になった私は部活のことを考えていた。

ずっと考えていたらいつの間にかもう家に着いていた。家に着いた私は深くため息をしながら家に入った。

「ただいま」

「あつ、ねえちゃんおかえり」

私を出迎えたのは弟の健太だった。まだ幼い5歳児だが生意気な性格なところは天下一品だ。

健太にあいさつした後、リビングに移動した。リビングは家族みんなが集う場所でもあってそこにはお父さんがお気に入りソファーでのんびりと座っていた。

「おお、おかえり真子」

「ただいま」

「今日母さんは食事会があつて向こうで済ますつて」

「うんわかった、いまから準備するね」

私のお母さんはお父さんと同じく忙しい共働き夫婦である。今日はいつともより早く帰れたみたいだ。

晩御飯の支度をしながら、まだあのことを考えていた。

熱心に部活動をしていた先輩の姿を思い出す。

なんだろう、この胸が弾けそうな感じは。こんな感じは初めてかも。

「ねえちゃんどうしたの？手が止まってるぞ」

「いや、な。なんでもない！」

私は晩御飯の支度の続きを始めたが、手が焦ってしまつて包丁で

指を切ってしまった。

「いったーい！」

「だめだ　　頭の中が先輩のことではいっぱいになり、集中できなかった。」

「どうしたんだい真子にしては珍しいな」

「いやいや、私にだってたまにはこんなことだってあるのよあははは」

「そうかい？」

「晩御飯を作るのは今日はやめて、出前を頼む事にした。」

「夕食を食べ終え自分の部屋に行って寝ようとしたが、やはり眠れなかった。」

「はあ　　、どうしたんだらう私　　」私は大きくため息をした。

「次の日の放課後、また堀川さんと一緒に部活見学をしようとしたけど堀川さんは用事があったて学校が終わった後急いで帰っていった。私は暇だったので、また例のあの場所へ向かうことにした。」

「製菓部。私が昨日から気になっていた部活だ。」

「私は製菓部の部屋の前まで来たが、ずっとその場に立ち止まる。」

「ドクン　　ドクン　　ドクン」

「部屋の前にいると昨日より遥かに心臓の音が大きかった。下手をすれば病院送りになるかもしれない。しかし、私は勇気を振り絞り目の前のドアを開けることを決意する。気を落ち着かせて深く二回深呼吸をする。」

「よし！心の準備が出来た私はドアを力いっぱい開ける。」

「そこには昨日と全く同じ風景だった。部活動をしている先輩の姿が目に見え始める。」

「あ、あの　　！」

「ああ君は昨日の　　どうしたんだい？」

「わ　　わた、私　　その　　」

やはり言えない。だがここで今伝えなければならぬのだ。私は赤面になりながらも担任の先生からもらった部活入部届のプリントを先輩に差し出しながら大きな声で言った。

「あああの、私を製菓部の入部をお願いします！」

「うん、いいよ」

言った。言えた。やったー！

私はあまりにも嬉しすぎてピョンピョン跳ね上がった。

「自己紹介がまだだったね、僕の名前は2年B組の天野爽あまのそういち一ご覧のとおり部長の僕一人だけ」

「じ、じゃあ天野先輩。まず最初私は何をすればいいのでしょうか？」

私は猛烈に張り切っていた。

「いや、特にないよ。ゆっくりしといて」

「そうですか」

天野先輩は私にそう言っただけで準備室へ入った。

さすがにいきなり製菓作りはさせてはくれない。そのことは既に承知済みである。しかし、何もなくていいというのは変だ。ここは製菓部なのだからお菓子を作るのではないのか。

部室中をうろつろつしていると机の引き出しからなにやらプリントが出てるのが見えた。気になった私はそのプリント引っ張り出した。

そこには「部活廃部のお知らせ」と大きく書かれてあった。下には部活リストがあつてそのリストにはたった一つしか部活名が書かれていなかった。見てみると、部活廃部リストには「製菓部」と書いてあった。これを見た私は急いで先輩がいる準備室に入る。

「せ、せせせ先輩！こ、これは一体どういうことですか！？」

「ああ、見つかったやつたか」

先輩は困ったそうな顔をして頭をかく。

「えっ？」

「実は明日で製菓部は廃部になるんだ」

「えー……!?」

部活動1 部活に入部

そして部活が廃部！？（後書き）

みなさん、いかがでしたか？私の趣味はスイーツを作ることから生まれた物語であります。主人公の白井真子はツンデレっという設定になっておりますが今後のツンデレっぷりが期待です。

この物語はスイーツを作り、甘酸っぱい恋をするというなんとも見るだけでお腹がいっぱいになってしまうかもしれないかもしれませんが今後とも私ゴキポンをよろしく願います！m(´`´´´)m

## 部活動2 先輩と製菓部の因縁の過去

(前書き)

真子は勇気を振り絞ってなんとか製菓部に入部したが、明日には廃部となる。

教頭先生にお願いしようとか、製菓部をゴミ扱いみたいにひどいことを言う。

なぜだ。

先輩が一年の時に一体何が起きたのか。

## 部活動2 先輩と製菓部の因縁の過去

私はそのことを聞いて絶叫した。自分にとって高校人生で始まりの場である製菓部がなんと明日廃部になってしまう。

「でもどうしてさつき入部することを受け入れたの？」

「折角来てくれたからがっかりしないためさ　ごめん」

「廃部のことを知るとますますがっかりするわよ!」

天野先輩はペコペコと謝った。非常に不愉快だった。どうして廃部になるのか天野先輩に聞いてみた。

「ねえ、どうして製菓部が廃部になるのよ」

「それは教頭先生の命令で」

私は急いで職員室へ駆け込んだ。必死で走った。

「失礼します! 1年D組の白井です。教頭先生に用があつて来ました!」

職員室中に聞こえるぐらいのを発した。声を聞いた先生が教頭先生を呼びに行った。

職員室の中で待たせてもらい、数分後ついにやって来た。

「どうかしましたか白井さん？」

「今日は部活廃部についてお話に来ました」

「あら、そうですの　　っでどちらの部活でしょうか？」

「製菓部です。明日には廃部になると部長の天野先輩から聞きました」

「ああ、あの軟弱な部活のことですね」

教頭先生にしては予想外な発言に私はちょっと驚いたが、軟弱はあまりにも言い過ぎである。

「どんな部活も軟弱ではありません。もちろん、製菓部もです!」

「あなたは製菓部の何のですの？」

教頭先生は問いかけてきて、私は製菓部の部員としてはっきりと答えた。

「私は、製菓部の部員です」

「部員？ホホホッ製菓部に部員なんかいたんですの？」

気味の悪い笑い方をし始め、さすがの私もイライラしてくる。

「どうして製菓部を廃部しようとするんですか？」

「ただの軟弱な部活だからよ、ただそれだけですよ」

まるで教頭先生と国会議事堂で議論をしているかのようだった。

「何度言われても同じ事です！そんなに廃部にしてほしくないなら、私の前で土下座をしなさい。それとも私の足を舐めてもいいですよ、なんとこの教頭相当なドSだ。プライドの高い私にそんな恥ずかしい事は絶対にしたくない。

ていうかそんなことしたら私までおかしくなりそう。

私はしばらく無言になりもはやなすすべもなかった。

「さあ、私はこれから用事があるのでさっさと帰りなさい」

教頭に職員室からおい出された。

さっきの発言は本当なのだろうか。

ただの軟弱な部活だからよ、ただそれだけですよ。

部員？ホホホッ製菓部に部員なんかいたんですの？

教頭の口から発した言葉が私の脳裏に浮かんでくる。

わからない。やっと思つつけた相応しい部活が廃部になつて

しまう理由が私にはわからない。すると目の前には天野先輩

がいた。

「教頭先生のところに行つてたんだね」

「どういうことですか？どうして、製菓部が廃部になるんですか？」

天野先輩は深く深呼吸して事情を説明し始める。

天野先輩が去年この部活に入部したときは、部員は5人いた。でもその先輩達は僕にスイーツの基本的な作り方でさえ教えてもらえずずっと雑用係をされ続けていた。先輩達からひどい仕打ちをされた。失敗作を食べさせられた。彼はずつと我慢し、こらえ、ただひたすら耐え続ける地獄の日々を送った。そんなある学園祭の日に事

件が起きた。

製菓部もその準備で忙しかった。ほとんど一人だけそれをやらせ、他のみんなはどこかへ行った。

こんな大事な日に一体どこへ行ったんだ。

他のみんなが心配で探しに行くと、なにやら煙り臭い匂いがした。

これは、煙草？理科室にあるガスバーナー？それとも　　火事か！

すると、ジリリリと突然火災報知機が鳴った。

天野先輩は煙が出ている方へ急いで向かった。その場所は視聴覚室である。

ドアを開けるとそこには、製菓部の先輩5人組みがいた。

「なんだ天野かよ、脅かしやがって」

「なにやってるんですか先輩達！」

「何って、見りゃわかるだろ。学園祭を盛り上げるためのショーを始めてるんだよ」

何を言っているのか分からなかった。そんなことより早く火を消そうと試みるが、

「おい天野ちよつと頼みがあるんだけどさあ」

「な、何ですか　？」

「俺たち今から水を汲みに行つて来るからさあ、おまえここで待っててくれないか」

「え？」

「だから、水を汲んで火を消すつて言つてんだよ。もうショーはこのくらいにしようと思つたんだよ」

先輩達の発言で天野先輩はホツとした。先輩達の言うとうりにここで待った。しかし、いつまでたつても来なかった。

まさかと思いドアを開けようとするが、外側から鍵が掛かっていた。どうやら先輩達に騙されたみたいだ。

このままいては危ないとドアを叩き誰か助けを求めた。

「おい、誰か助けてくれ！」

すると、外側から人の姿が見えた。

「天野君元気にしてるかい？」

「その声は先輩ですか？このドアを開けてください！」

「だーめ 八八八！」先輩達は笑いながら、天野先輩を閉じ込めその場を去って行った。

彼は諦めなかった。諦めずずっとドアを叩き続け助けが来るのを待った。

しかし、誰も来なかった。おそらくみんなはどこかに非難しているに違いない。

ドアを叩くのをやめ、床面に座り込んだ。

「どうして どうしてこんな目に遭わなくちゃいけないんだ」火はさつきよりだんだん勢いが増し、ほとんどが真っ赤に燃えていた。しかもなにやら赤い物が見えた。よく見ると石油ストーブなどに入れているポリタンクだった。

それに気づいた彼は、絶句した。

ああ、もう終わった。

やがてポリタンクは火の中に入りそして、大爆発が起きた。

ドカーンッ！

凄まじい破壊力で全ての教室の窓ガラスが一斉に割れ一気に炎が大きく広がり、近くの教室まで燃えてしまう。

先生達が連絡してくれたおかげで、消防車が来てくれた。

数分後、炎は全て消えた。奇跡的に負傷者や火傷を負った人は誰もいなかった。

もちろん天野先輩も。

あのとき、炎が燃えている場所に消防隊員が駆けつけて来たときにはすでに倒れていた。爆発の勢いで突然意識が失ったのだ。

天野輩は放火した疑いで逮捕され、パトカーに乗せられた。逮捕されたのは、彼だけではなかった。先輩達まで連行されていた。

先輩達が視聴覚室から出て行ったのを目撃した。

「俺たちは無実だ。俺たちはあいつが放火したの見たんだよ！」

なんと、視聴覚室に放火したのを天野先輩のせいになっている。

「はいはい、詳しい話は署で聞かせてもらうよ」

あの出来事の話は署で話すが、先輩はやっていないと主張する。

しかし天野先輩は真実を話し彼は無実となり、5人の先輩達は懲役1年5ヶ月となりしばらく反省しろと校長先生の命令により退学にはさせず停学になった。

これでめでたく終わった。悪い先輩達にいやなことを押し付けられたり、巻き添えにならずにすむ。

でも、警察署から帰ってきた天野先輩は学校みんなや先生達からきつい目で睨んでくる。

するとそこには教頭先生がいた。

「なんですかあなた。のこのこと戻って来て、不愉快ですこと」

「えっ？」

「また何か為出<sup>し</sup>でかすかわかったもんじゃありませんこと」

確かに先輩達から離れることができた。けど、そうになると製菓部は天野先輩たった一人だけになってしまった。

なんとしても部員を増やさなければと思えば部活の勧誘をするが、クラスメート達は近づいてくる彼から逃げられてしまう。

なぜなら、怖いから。

あんなに恐ろしいことが起こってしまったんだ。さすがのみんなも近寄れないのも無理もない。

絶望だ。

生徒会からもそんなお金はもつたいなくて出してられないよと言われ、予算を一円もくれなかった。

仕方なくバイトして稼いだお金を部活に使おうと毎日朝から晩まで働いても全然足りない。

そんなある日、教頭先生がやってきた。

「あなたに良いことを教えにきました」

「良いこと！それは何ですか！？」

生徒会から予算をもらえるのか、それとも新しい部員を変わりに

見つけてくれたのかと思いきや。

「職員会議の結果、今日から製菓部を廃部することになりましたから今すぐ荷物を整理しなさい」

なんと、製菓部を廃部になったということを伝えにきただけだった。

それを聞いた天野先輩は驚いた。

「えー！」

「片付けが終わったら私を呼びに来なさい」

部室から出ようとした教頭先生を天野先輩はお願いをした。

「教頭先生お願いです！どうか製菓部を廃部しないでください！」

「もう決まったことなんです。人間諦めが肝心です」

そんな。製菓部が廃部？つまり、部活が無くなる。

いやだ、そんなのいやだ！

天野先輩は回りこみ、教頭先生の前で土下座をした。

「あなたはな、何を」

「お願いします！製菓部を大好きな製菓部を廃部しないでください！」

「お断りです。これはもう決まってしまったことなのですから」

「お願いしますお願いします！」

天野先輩は頭を床に何度もぶつかりながらも必死で頼み続けた。

「」

しばらくすると頭が止まり、床に当たりすぎたせいか涙がポロポロとこぼれていた。

そんな天野先輩の姿を見た教頭先生こう告げた。

「製菓部の廃部は無しにしましょう」

「ほ、本当ですか！？」

「但し、一年です！後一年だけあなたに有意義な部活の時間をあげましょう」教頭先生はそう言い残して、去っていく。

「ありがとうございます！」

天野先輩は教頭先生に感謝の気持ちを含めた大きな声でお礼をし

た。

そしてあれから一年が経ち、製菓部の廃部が明日ということである。

「そんなことがあったんですか」

「だから僕はこの残りの一年間を大事に使ったんだ。生徒会からも少しだけ予算ももらえて本当に嬉しかった」

天野先輩は本来去年から製菓部はなくなっている頃だったのに、それができてとても嬉しそうな顔をしている。

しかし、先輩は嬉しくても私は嬉しくない。

「じゃあ、今この部活に入った私はどうなるのよ？」

「あ、そうか。明日廃部になるから、君できなくなるね」

「感心してる場合じゃないでしょ！」

私は先輩に渾身のツッコミをした。

「こんなことしてる場合じゃないわね、もう一度あのドS教頭に頼んでみる」

「無理だよ。もう約束したからね」

天野先輩は私を諦めさせようとしている。

「製菓部が無くなったら、私はどうなるのよ」

「明日から他の部活に入りなさい。その方が君のためになるよ」

先輩は私にアドバイスをしているつもりだが、私は納得がいかない。

先輩の話を聞いて、拳を強く握り我慢したがもう限界だった。

「何が私のためよ！私はこの部活に入りたいのに、明日無くなるのよ！」

「先輩は無言になった。」

「自分さえ楽しければそれでいいの？一年だけじゃなくてずっと続けてよ！来年来る後輩達のために部活を続けてよ！」

「そんなこと言われても」

あきらかに今の先輩はすごい弱気でもはや頼りがいが無かった。

「もういい！私の気持ちも知らないくせに最低！」

私は走った。自分の家まで猛スピードで走った。

もう先輩の力は借りない。何としてでも製菓部を廃部させないよう  
うにしてみせる。

最後まで絶対に諦めない。こうして私は、また新たな目標が生まれ、製菓部を廃部させないことを決心した。

## 部活動2 先輩と製菓部の因縁の過去

(後書き)

第2章は天野先輩の過去の話という内容になりましたけど、これはちよつとやりすぎたかなと自分は思っています。

えっ、どこかっつて？

それはまあいろいろありますけど。女の子を泣かせる男は本当に最低ですね！

みなさんもそのような人になっちゃいけませんよ。

さて次回は真子のご活躍ぶりをどうぞお楽しみくださいーい！

**部活動3 私はあきらめない！（前書き）**

ついに製菓部が廃部を迎えようとした今日、真子はある作戦を決行する。しかし、誰も入部してくれず絶望を感じる。

教頭が校長室にいると知った真子は校長室に入るが、そこには天野先輩が。

### 部活動3 私をあきらめない！

翌日私はある作戦を実行しようとしている。そのある作戦は昨日の夜に考えた。そのときの私は学校で問題があり、それがトラウマになってそれ以来登校拒否をして引きこもりになったような状態だった。

これなら完璧だ。もうあんな頼りない先輩の力を借りる必要がない。

「廃部がたしか今日の夜になる予定のはずだから、まだ時間はあるわ」

私は行動を開始した。まずは、ビラ配り。ただ掲示板に貼るだけでは見る人がいないかもしれないから、直接ビラを渡して入部してもらおうという方法である。

この日のために私は誰よりも早く朝一番に学校に着き、入ってくる生徒をずっと待っていたのだ。

「お願いします、製菓部です」

校門に入る生徒一人ずつにビラを配った。すると、そこには堀川さんの姿が見えた。

「おはようございますう、白井ちゃん。何をしているのですか？おばさんからもうとっくに出かけたよと聞いたんですけど」

「実は私製菓部に入部したの」

「へえやっぱり白井ちゃん製菓部にしたんだ」

「やっぱりって、どういうこと？」

すると堀川さんはくすくすと笑い出す。

「だって白井ちゃん、初めて製菓部の部室にいる先輩を見ていたじゃないですかあ。それってもしかして」

それを聞いた私は一瞬に頭に湯気が上がった。

「あわわわ！ち、ちよつと堀川さん違うってば。べ、べべべ別にあの人が好きだからって入ったわけじゃないんだから」

「あー、やっぱりあの先輩が好きなんです。白井ちゃんやるねえ」  
「もう、だから違っつてば！」

私は堀川さんに完全に遊ばれていた。

「くすくすわかりました。お菓子を作る事が好きだから入部したんですよね」

「うん、そうなんだけど。実は今日で製菓部廃部になっちゃうんだ」

「ええっ！どうしてですか！？せっかく好きな先輩と一緒に部活動ができるのに」

「だから違っつてば！」

私は堀川さんに昨日あったことと廃部のことを全て打ち明けた。それを聞いた堀川さんはちよつと暗い表情になった。

「そんなことがあってんですね」

「うん。でも廃部は今日の夜だから諦めるのはまだ早いと思っつてこっつてピラを配ってるの」

「がんばってくださいね」

「ありがとう」

堀川さんの応援のおかげで私はさらにやる気が上がってきた。

やってやるぞ。あのドS教頭にぎゃふんと言わせてやるんだから。しかし、いくらピラを配っても減らない。たくさん刷りすぎたせ

いだろうか。

今更そんなこと考えても仕方が無いので、とにかくピラを生徒達に配るほかはない。

「おねがいしまーす！」

私の得意の元気な声で生徒達に目を向けさせる。

すると、その声に釣られたのか男子生徒達が私のもとに来た。

「君かわいいね、何してるの？」

「部活の部員募集のピラをみんなに配っているの」

「へえ、一人だけがんばるね。何の部活なの？」

「製菓部です」

「製菓部か、がんばれよ」

「ありがとう！」

男子生徒達はビラを手にして行った。

こうしてビラ配り作戦は一時間でほとんど無くなった。なんかとてもうれしい気分になる。

そろそろ教室に帰ろうと思いつつ後ろに振り向いたら、配ったはずのビラがあちこちにバラバラにあった。

「これはもしかして、みんなに配ったはずのビラじゃ  
仕方なく地面においてあるビラを全部拾う。その中にはビリビリに破かれていたり、クシャクシャにされているのもあった。

これはひよつとして、さっきの男子生徒達のせいでは  
いやだめよ。人を疑ってはいけない。

ビラを全て回収し終わると、朝のHRのチャイムが鳴った。

結局私は遅刻をし先生に怒られた。

クラスメートの中には笑う人が少しいた。

「へへへ、高校生にもなってるのにまだその遅刻の癖は直ってねえのかよ」

「なんですって！」

男子生徒に注意しに行くと、彼は今朝私に声を掛けた人だった。

「あつ、あんたあのときの！」

「何っ、さっきの女の子っておまえだったのか！」

ビラを捨てていった犯人だということを確信した私は校舎でビリビリに破かれていたビラを彼に見せる。

「なんだよこれ？」

「見ればわかるでしょ。これ、あんたがやったでしょ」

「ちえっ、ばれたか」「彼は私に軽く舌打ちをする。

「あんたさつきまで『がんばれよ』って言ってくれたのにどうしてこんなことするの！私は一生懸命やっつてるのに」

するとイライラしたのだろうか彼は突然怒鳴り声で言う。

「うるせえんだよ！何が製菓部だ。そんな犬の糞臭え部活なんぞ入

りたかねえよ！」

部活を馬鹿された私は思いつきり、彼の顔面に一発パンチをお見舞いした。

その威力は後ろのロッカーにまで吹っ飛んだ。

「いつてえ」

「あんたこれ以上私の部活を侮辱したら、ただじゃ済まさないからね！」

「知ってるんだぜ。俺の兄貴はこの学校のOBだからよ。学園祭で製菓部の連中のせいで滅茶苦茶にされて兄貴の屋台まで灰になったつてな」

去年天野先輩の先輩達が視聴覚室を燃やすときに出た火が男子生徒の兄の屋台まで火が移ったそうだ。

私はそれ以上彼に何も言えなかった。

「はいはい白井席について、授業が始まるわよ」

「昼休みの時間、私のクラスで噂をしていた。

「ねえ聞いた？さっきの〇〇君のお兄さんかわいそうよね」

「そうそう、実は私の友達のお姉さんも彼のお兄さんと同じ学校でひどいありさまだったつて」

「マジ、それやばくない？」

あのときの話で持ちきりとなった。このままじゃ製菓部の勧誘作戦が台無しになってしまう。

でも、私はあきらめない。たとえどんな理由があっても絶対に廃部なんてさせない。

昼休憩みんなが昼食の時間をとっているなか私はいろんなクラスを回り問答無用で教室に入り込んで次の作戦にうつったのだ。

「たのもー！」と大きい声で言った。

「えー何、何事？」

「お菓子が好きの人、作るのが好きな人は非、製菓部に入ってくださいーい！」

「何だよ、部活の勧誘かよー」一人の男子がめんどくさそうな口調で言った。

「見学でもいいので来てくださーい！来てくれると製菓部の様子がよりわかりやすいです！」

ビラをクラス中に配るが誰一人受け取ってくれない。

声を掛けても無視される。なんか少し寂しく感じる。天野先輩も去年こんな感じで何も悪い事してないのにいじめを受けながら部活動をしていたんだね。

「  
」

私は静かに教室から出た。結局誰一人入部の声も掛かって来ずかつ昼休憩のときに食べる弁当も食べ損なってしまった。

午後の授業が終わると、三時過ぎだ。もう時間がない。このままじゃ廃部になってしまふ。そんなの嫌だ。製菓部が無くなったら私はいったいどこの部活へ行けって言うの。

もはやビラを配ったり勧誘は全く効果がない。

私は奥の手を使うことを決意する。本当はこんなことはしたくないのだが、仕方が無い。

職員室に入り、教頭先生は何処にいるのか聞くと校長室にいますと聞いた。

校長室　、なぜだ。ま、まさか　。

私はやな予感がし急いで校長室へ向かった。

「失礼します！」

校長室のドアをノックし入る。そこには校長と憎たらしいDS教頭ともう一人いた。

なんと天野先輩だった。どうしてこんな所にいるの。

すると天野先輩は教頭に何かを渡そうとしている。

「本当によろしいんですね？後で吠え面かいても知りませんよ」

「いいんです。もう僕には製菓部を続ける資格もないし、部長になる資格もないと自分で思っています」

「随分ときっぱり言うのね。去年私があなたに言ったこと覚えていませよね」

「はい。『一年だけチャンスをあげましょう』と仰っていました」  
「なにやら、去年のことを話しているみたいだ。」

「今まで有難うございました」

天野先輩が持っているのは、なんと部活の廃部届だ。

「だめー！ー！」

私は無意識に天野先輩が持っている廃部届を奪い取った。

「あ、あなたは白井さん！どうしてあなたがここに」

「ああ、私が入れてあげたんですよ」

「校長先生、あなたという人はいつつも言っていますでしょ！用も無い生徒をここに入れちゃいけませんって 特に女生徒！」

「いいじゃないですか、若い女の子を見ていると私は元気が出るんですよ」

「そんなくだらない言い訳は私には通じませんよ！そ、そんなことより白井さんどうしてこんなところに？」

教頭は本当に話を切り替えるのが速過ぎる。

「天野先輩も私がこんなところに来る事は想定外のような表情をした。」

「白井さん、まさか君は」

天野先輩は気づいたが、私は教頭をお願いをする。

「お願いです教頭！製菓部を廃部しないでください！」

「フンツ！言ったでしょ。もう廃部するのですってね。もう約束の

一年は今日が丁度その日なんですよ」

天野先輩は教頭に後一年だけ部活動の時間をくれたから、おそろくそのことでここに来たのだろう。

「」

私は沈黙した。

「どうしたのですか白井さん？何も言わないということは負けを認

めたということですね」

私はしばらく考えた結果ついに奥の手を使う。

「な、何のまねですか？」

私は土下座をして教頭をお願いをした。

「お願いです！ 廃部しないでください！」

「い、今更土下座をして許せるを思っているのですか？」

「私は製菓部が好きなんです！ だから私から大好きな部活を消さないで！」

天野先輩はその言葉を聞いて目の色が変わった。すると、

「僕からもお願いです！ 製菓部を廃部しないでください！」

「えっ！？」

私は突然天野先輩も一緒に土下座をしたことに驚く。

「いけません！ 約束は約束です」

校長先生は私たちが土下座をしている様子を見てこう言う。

「教頭先生、製菓部の廃部を免除しなさい」

「ちよつ、校長先生！ 何を仰っているのですかお」

「彼らは製菓部を愛しているのです。その愛している部活を、大好きな部活をあなたは消すのですか？ この世には軟弱というものは何もないんです。どうして生徒達はあんなにがんばっているかわかりますか？ それは、大好きな部活があるからなのですよ。そのことはあなたもご存知ですよね？」

「そ、それは」

さすがの教頭も頭が上がらない。

「い、いいでしょう。製菓部の廃部を免除しましょう」

教頭の口から免除という言葉を聞き、私は叫んだ。

「やったー！ー！ー！」

嬉しい、とても嬉しい。今日製菓部が廃部になるはずなのにまさかの奇跡が起きたのだ。

「校長先生ありがとうございます！」

「いやいや、大した事はしていませんよ。二人ともしっかりがんば

ってください」

「はいっ！」と私はしつかりした声で返事をし校長室から出た。

「白井さん、今回だけですからね！もし何か問題を起こしたら即刻廃部してやりますからね！」と教頭は私に捨て台詞を残してすぐさま去っていった。と

これで一件落着となり、明日から正式に部活が始まる。その時私は急に天野先輩に言うべき事を思い出し、帰ろうとした天野先輩を呼び止めた。

「天野先輩。その」

やはり、すぐには言えない。すると天野先輩の口が開き、

「そういえば、白井さんに言いたい事があったな」

「えっ？」

「白井さん、ありがとう！」

私は天野先輩にお礼を言われ、急に顔が赤面した。おまけに私より先に言われて、なんかちよつとムカツとした。

「べ、別に先輩のためにやったわけじゃないんですからね。私はただ製菓部が無くなってほしくなかったし、ほ、他にもやりたいことがあったけなんですから」

「やりたいことって？」

「そ、それは。な、何でもいいでしょ！」

「ふーん、そっか。じゃつまた明日ね」

天野先輩は私にさよならをして去ろうとした。

「天野先輩！」

私はまた天野先輩を呼び止めた。

「私は絶対にあきらめませんから！たとえどんなことがあっても私はこの部活をあきらめませんから、天野先輩もあきらめないでください！」

私が最後に言いたかったことがようやく言えた

「うん、わかった。一緒にがんばろう白井さん！」

「はいっ！」

私は天野先輩に大きく手を振ると、天野先輩も私に手を振ってくれた。

こうして私と天野先輩は製菓部を守ることを決意し、明日から二人だけの部活動が始まるのだった。

**部活動3 私はあきらめない！（後書き）**

実によかったですね。校長先生の言葉で教頭を圧倒してしまいました。まさに校長先生は切り札といっても過言ではありませんねww

w。  
さて次回からは真子と天野先輩との二人きり（？）の部活動が始まります。

部活動4 早くも私、部活退部！？（前書き）

製菓部が廃部を免れてから何日か経過し二人で部活動をしていたある日、真子はいつになったら部活動をさせてくれるのかと聞こうとするが、天野先輩の様子がおかしかった。

友達の堀川さんに相談をするがその話を聞いて真子は疑心暗鬼となる。堀川さんが言ったこととは。

#### 部活動4 早くも私、部活退部！？

校長先生の説得により、製菓部は無事に廃部にならずにすみ、これで天野先輩はこれからも続けられるようになった。

そして私もこの春から製菓部の新入部員となった。

あれからまだ5日しか経っていないく、未だに部員は増えず私と天野先輩の二人だけで部活動をしている。

天野先輩はとても嬉しいのかなんだかこの前私が初めて会った時よりいい笑顔をしている。生徒会からもほんのわずかだが部活の予算をもらっている。

昨日もらった予算がたったの1500円。これだけでどうしろっというのよと思った。これじゃあ安月給なところでバイトをしているのとなんら変わりが無い。

美紗姫学園は基本的にバイトは禁じられているが、私は事情があって今特別にバイトをしても良いと学校から許可を得ている。

さらに私は気になっていることがある。

それはいつになったら私にお菓子を作らしてくれるのかということである。

この前何を作っているのですかと天野先輩に聞いてみたが、その質問には答えてくれなかった。

気になってしょうがない。もう一度同じ質問を試してみる。

「あのう、天野先輩。聞きたい事があるんですけどー」

「白井さん、その道具僕が洗っておくから君は帰ってもいいよ」

「えっ、ちよっと」

「じゃあね、また明日」

天野先輩は私の話を無視する。

「分かりました。失礼します」

もうこれ以上聞いても無駄だと思って諦めた。

私はいつも通っている廊下を歩きながら考える。

製菓部が正式な部活になってから天野先輩は私の話を無視し始めた。

しばらくそのことを考えながら無言のまま家に下校する。

「姉ちゃん、おかえりー！」

私は弟の健太のあいさつがまるで聞こえなかったこのようにそのまま部屋へ向かう。

「姉ちゃん？」

健太はきよんとする。

「母さん！姉ちゃんが無視する！」

「あらあら、きつと真子はあなたのことうるさいって思っているのよ」

「あーそっか　　って、何でそうなるんだよ！姉ちゃんはいつもあいさつを返してくれるんだよ！」

「確かにこの頃変なのよねえ」

いつも私のことを思ったこともない母が珍しく心配をする。余計な心配だ。

食欲も取らなくなり、そのままその場を後にした。

翌日、堀川さんに相談をしてみる。

「へえそうなの？真子ちゃんはその先輩の好みのタイプじゃないからじゃないんですかね？」

「よく分からないけどさあ、製菓部の廃部を免れて次の日からずっとあんな調子なのよ」

すると堀川さんともないことを言い出す。

「もしかして、真子ちゃんのこと用なしじゃないんですか？」

「え　　」

「だって、真子ちゃんが製菓部に入ったり、真子ちゃんの頑張りで廃部を免れたんですよねえ。つまり、製菓部が正式な部活になってから、もう真子ちゃんは用はないということになるんじゃないですかねえ」

「私  
」  
私は息を飲み、少しぞつと感じた。

天野先輩はそんなことを思っているの。いや、そんなはずはない。あんなに優しい天野先輩がそんなこと思っている訳がない。私はそう信じながら、今日も部活をしている調理室へ向かう。やはり今日も天野先輩はいた。

「こんにちわ、先輩！」

「やあ、こんにちわ白井さん」

私が部屋に入ったらもうすでに部活動を行っていた。

「先輩！私の話を聞いてください」

「悪いけど今手が離せないんだ。後にしてくれないかな」

「じゃあ作業しながら耳を傾けてください。先輩は一体何を」

「あつ、白井さんごめん！今日大事な用事があったんだっ！」

天野先輩は慌てた様子でその場を去ろうとするが、私は逃げようとする先輩の腕を掴んだ。

「!？」

「どうして私から避けようとするんですか？」

「別に避けようとしたわけじゃないけど」

「もしかして私がここにいると迷惑なのですか？」

「そ、そんなことは」

天野先輩は私を見ずに目を逸らしている。あきらかに何かを隠しているような表情であった。

「ちよつと私たち同じ部活の部員なのですから、困った時は相談するものじゃないのですか？私は邪魔者なのですか？先輩は製菓部が復帰するためなら人をゴミみたいに扱うのですか？」

「な、なんのことを言っているんだか全く理解できないよ？」

「先輩は他の人を利用して製菓部が復帰したらその後おまえは用済みだつて言つてすぐにやめさせようとするのですか？」

「ちよつと、白井さん。落ち着いて」

私の耳には天野先輩の声が聞こえていなく、涙がぼろぼろとこぼ

れていく。

天野先輩は腕を掴まれたまま暴れている私を止めようとするがそのとき、バチンツ！と天野先輩は平手打ちを受けた。

「最低っ！こんな部活やめさせられる前にこっちからやめてやる！」

「待って、これは何かの誤解ー」

私はすぐに部室から出て、涙を流しながら長い廊下を走り続けた。

そしてやがて我慢をしていたのか急に泣き始め、その声は学校中に響き渡った。

**部活動4 早くも私、部活退部！？（後書き）**

いきなり真子が部活をやめるといふ展開になってしまいました。でもまだまだ終わらせるわけにはいかないよ。なぜなら、始まったばかりなのですから。

次回のお話は誤解が解けるのであります。お楽しみ

## 部活動5 迷いの進路(前書き)

疑心暗鬼により、部活をやめることになってしまおう白井真子。やめるのはいいがこの先どうすればいいのか考えていなかった。

そこで友達の堀川ルミに相談をのっってみるが。

## 部活動5 迷いの進路

「最低っ！やめさせられるくらいなら、こっちからやめてやるわよ！

「言ってやった。これで私は雑用されなくていいんだ。そう私は心の中でそう思っている。そうよ、本当は私料理なんてあんまり好きじゃないし。お父さんとお母さんはいつも忙しいし健太の面倒も見ないといけないから、し 仕方なくやってるだけだから！」

私は独り言を言いながら長い廊下をせつせと歩く。

先輩にやめてやるってあんなこと言っちゃったけどこれからどうしよう 。 にも考えてなかった。

後先のことを考えないで行動するのは私の短所である。そしてこれからどうしようか私は考える。そのとき私はあることに気づいた。退部届を出していないということ。

「ああ、やめる前に退部届提出していなかったわ。退部届部室にあるのに」

私は大きく溜め息をした後に仕方なく部室に戻り、退部届を取りに行く。

部室に入るとそこには部活動をしている天野先輩の姿があった。

天野先輩は微笑ましい顔で私を見る。

「白井さん。戻ってくる気に」

「勘違いしないでよ、部活の退部届を取りに来ただけだから！」

「」

私はキツイ目で天野先輩を睨みながら、部室を出る。

自分の下駄箱に入っているローファーに履き替えようとすると、クラスメートのルミちゃんが駆け寄ってくる。

「真子ちゃんあん！」

「堀川さん」

「私ねこの前部活見学して気に入った部活があったんですよ」

「へえそうなんだ、よかったね」

堀川さんはまだ部活に入っていないためいろんな部活を見学している。やつと堀川さんの気に入った部活が見つかったんだね。

私は堀川を激励する。

「それでね真子ちゃんが入ってる製菓部にも興味があつてね、そつちも見に行こうかなと思つているんだけど今度見学しに行つてもいいですか？」

「だめっ！」

「!？」

思わず大声で言つてしまい、堀川さんは驚いた。

「ごめん、急に大声を出しちゃつて」

「いいよ気にしないでください。ところでさっきのだめつてどういうことなのですか？」

「実は」

私は今の状況を堀川さんに説明した。

「あちゃ〜そんなことがあつたのですか。まさか私の予感が当たるとは思いませんでした」

「まだわからないんだけど、一体どうすればいいのかな？」

「やめればいいんじゃないですか？」堀川さんは即答した。

「え？」私は堀川さんが即答したことに戸惑いを隠せなかった。

「自分がやめたいのなら素直にやめて別の部活に入部すればいいのです」

「そうかな」

私はおおきく溜め息をする。

「大丈夫ですよ、真子ちゃんならどんな部活でもやっついていきますよー！」

堀川さんは必死で私を励ます。私のこと心配してくれている堀川さんの励ましを応えなければならぬ。じゃないと私のマイナスオーラが堀川さんにまで影響を及ぼしてしまう。ここは笑顔でいないと私はにこつと笑う。

「うん。堀川さんありがとね」

「気にしないでください。困ったときはお互い様ですから、遠慮しないでいつでも私に相談にのってください」

「うう　　本当に　　ありがとう　　グスッ」

私は涙が出ないように堪えていたがとうとう限界がきてしまい、涙を流しながら堀川さんに抱く。

「よしよし今のうちに涙をたくさん流してください」

「うん　　うわぁぁん！」

私と堀川さんはしばらくその場に留まり、涙を流し終えるまでルミちゃんは一向に動こうとせずと私を抱いていた。

こうして夕暮れまで続きようやく涙が止まり、二人は横に並んで一緒に下校をする。

「よかったねえ真子ちゃん」

「堀川さんあのさ、このことは他の人たちには内緒にしてくれない？」

私は顔を赤面しながら堀川さんをお願いをする。

「ええどうしてですか？涙を流したこともですか？」

「な　　ななな涙！？違うもん、あれは汗だもん！今日はやけに暑かったのよ。私がいっ涙を流したっていうの？」

堀川さんは黙り始めて考え事をした。

「じゃあさっきのことは全て水に流すということにしましょうかね？」

堀川さんは私に可愛くニコッと笑顔を見せる。

「まあ、堀川さんがどうしてもって言うのならそういうことにしてもいいわよ　　」

私は目を閉じてふいと横を向く。その姿を見た堀川さんはクスクスと笑う。

「ちよつと堀川さん、どうして笑うのよ！」

「フッフ真子ちゃんカワイイ　　」

「ええ？今なんて言ったのよ？」

「なぁんでもないです　　」と堀川さんは答え、私を走り抜いた。

「ちょっと！なんでもないってなによ？待ってよー！」

「八八八」

私は堀川さんと一緒に帰るはずが追いかけてこになっていた。そして二人とも笑うようになった。

堀川さんのおかげで悩みを打ち明けることができ、さらに私を笑顔にさせてくれた。

堀川さんから元気をもらったおかげでもう大丈夫。明日からまた人生をやり直せばいい。

翌朝早出をした私は部活の朝練の様子を見学すると、一人の教師が話しかけてきた。

「おう白井じゃないか」

「あ、高橋先生。おはようございます！」

この人は高橋 雅先生みやびで今年私のクラスの担任をしていて、ちょっと厳しいけどとても綺麗な女性教師である。

「しかし白井、こんなところでなにをしているんだ？」

「部活見学をしているんです」先生に対して大きな声で答える。

「見学？おまえ今部活入っているんじゃないか？確か製菓部に」

さすがに私が入部してる部活を知っている。でも今は違う。これは良い機会だと思った私は高橋先生に部活のことを話した。

「何い、製菓部をやめるだつてえ！？どうして突然。入部してからまだ一週間しかたつていないのに」

「すみません先生！こんなわがままな自分を許してください！」

私は部活をやめたことを高橋先生に深く謝る。

「はあ、しょうがない子だねえ」

高橋先生は頭を掻きながら呆れたなというような表情を見せる。

「なあ白井」

「は、はいー！」

「おまえそれでいいのか？」

「え？」

高橋先生の目つきが変わり、いつもノリノリな感じが急に雰囲気までもが変わった。

「だから、おまえは本当にそれでいいのかと聞いているのだ」

「そ、それは」

高橋先生の表情が怖くて口から言葉が出せないだけでなく、製菓部をやめてそれでいいのかと聞かれた後の返す言葉がない。

すると高橋先生はゆっくりと手を私の肩に乗せてきた。

「いいか白井。部活をやめる理由はいくらでもあるしこれまで私は部活をやめた子をいろいろ見てきたさ。自分に合わない、つまらない、先輩や同じ部活の人たちからいじめられるなどという理由で部活をやめて以来他の部活に入ろうとせずに帰宅部になったやつらはごまんといた。白井にもやめる理由はあるかもしれないが、だがこれだけは言わせてもらおう。一度部活を入部したからには最後までやらなければならないんだ。おまえはもう高校生なんだからそここのころはわかるな？」

「はい。3年間部活をやることです」

「そうだ。高校3年間部活をやりとおせば、大学へ進学するための第一歩に繋がるんだ」

そう今の私は高校生。後3年で私も社会の仲間入りになり、さらに大学へ行くか就職するかで私の人生がおおきく変わっていく。でも

「

「はあ まっ、まだ一年生だし入ったばかりだからまだ間に合うよ。そう落ち込まないの 私が泣かしたように見られるんだから」

「す、すみません」

「まただ。もう泣かないって決めたのになぜかかってに涙が出てしまう。」

「おい白井本当に大丈夫か？」

高橋先生は泣いている私を慰めようとする。

しかし私は自分の腕でこぼれている涙をこしこしと拭く。

「大丈夫です先生！ご心配をお掛けしましてすみませんでした！」

「そっそうか、大丈夫ならいいのだが。まあとにかく部活選  
びは慎重にな」

高橋先生は私にそう捨て台詞を残して職員室のある方向へ行つた。やっぱり私が出たことは自分の首を絞めているようなものだからね。私ったら自分勝手だなあ。

すると、突っ立っている私の姿を見たジャージの服を着ているいかにもスポーツ系の先生な人に声をかけられた。

「その君どうしたの？見かけない子だね」

「えっえ」と

「あ、わかった！さては部活見学者だね。いいだろう我が部に案内してやるう！」

「ああの違つんです。ただここを通りかかっただけなので失礼します！」

私は急ぎ足でその場を後にする。

仕方なく私はもう少し考えようとまた出直すことにして、自分の教室へ向かう。

こんな時間だからルミちゃんや他のクラスメイトたちもまだ教室にはいない。時間がくるまでのんびりしようと教室の戸を開けるとなんとそこにはあの教頭先生がいた。

「あら、白井さんではありませんか」

「きよ、教頭先生！」

「そんなに驚くことはないのではありませんか？まるでこの世には存在しないものがあるかのような目をして」

それは驚くのも無理はない。なぜなら、本来滅多に生徒の教室を訪れないはずなのにこの場にいるから。

「教頭先生はどうしてこの教室に。なにか用があるのですか？つていうかどうして席に座っているのですか？そこは私の席ですよ！」

「べ、別に大した用事はありません。ただこの席から見れる町の景色が綺麗ですなと思っただけです。部活をしている生徒たちの様子もこの目で見られますしね」

「ここは一階です！この窓から町の景色は見れません！」

全く教頭は本当に嘘をつくのが苦手のようだ。

「あら本当ですねえ。私つたら老眼鏡をかけていませんでしたわ」

「わかったなら私の席から降りてください。私が座れませんから」

「いやです。私はまだこの席が気に入ったのでもう少し座らせていただきます」

これはどう見ても私に喧嘩を売っているみたいなものだ。力づくでもどここうとすると、教頭先生はすぐに席から立ち上がった。

「もういいです。これ以上あなたの席に座ってしまうとあなたと同様におバカがうつってしまいますのでこれで失礼します」

ようやくどいてくれた。さすが教頭先生だ話がわかるお人だ。暇つぶしに1時間目の授業科目を準備をしようと鞆から取り出し、机の中に入れようとすると、机の中になにかが当たっていた。

なんだろう。中になにか入っているのかと探ってみると口紅がでてきた。

「あーっ！白井さんなんですかそれは？な、なんと口紅！？あなたという人は学校でお化粧をしているのですか？まあはしたない！汚らしい！これは今すぐにでも退学させるべきです！」

「ちよつとそんなにいつぺんに言わなくてもいいじゃないですか！しかもこれは私ではありません！」

しかしよく見るとこの口紅には「K・S」と書かれている。なんだこれは。ひよつとすると頭文字をとってつけたものなのだろうか。となるとこの口紅の持ち主と考えられるのは、

「教頭先生、これ先生じゃないですか！」

「な、なんのことでしょう？私そんなもの持ったことありませんわねえ」

「自分で鏡を見てくださいよ！思いつきり唇にこれと同じ色してい

るじゃないですか！」

「ちっ！バレちゃいましたか。紛れもなくそれは私の物です。さっさとお返しなさい」

教頭先生は私の手に持つている口紅をすばやく取った。

「どうしてこんな真似をするんですか？」

「きまつていることでしょう。あなたをこの学校から追放するためです！」

「どんだけ私のことが嫌いなのですか？」

「あなたが嫌いです。最も嫌いです！」

この人本当に言っちゃいけないことを口にしたよ。私が一体教頭先生に何をしたというのだろうか。

そして教頭先生は話題を変えてくる。

「あなた、製菓部をやめようとしているのでしょうか？」

「！？どうしてそのことを」

「私の耳はこの学校のあらゆる情報が集まってきているのです。勿論あなたのこともお見通しです」

どうして教頭先生がそんなことを知っているのかは大体見当はついている。おそらく私と高橋先生の話を盗み聞きしているか。あるいは、高橋先生からその話を聞いたかどちらかだろう。

「全くあなたときたらなにが廃部させないでくださいですか。三日坊主じゃないですか」

「そ　それは、」

「そんな口から出任せするような人はさっさとこの学校から出て行けばいいのです」

「」

「退部届は持っていますね？提出期限は明日の放課後までとします。あの人に最後のお別れの挨拶でもしていきなさい」

教頭先生はそう言い残して教室から出て行った。

すると教頭先生が出て行った後に堀川さんが教室に入ってきた。

「真子ちゃんどうしたのですか？さっき教頭先生が教室から出たの

見たんですけど」

「な、何でもない」

「でも」

「本当に、なんでもないの」

教頭先生の言うとおり私はあのとき私は製菓部を廃部しないでと土下座までしたことあった。おまけに私は中学生時代では女子のなかでは最強のスポーツマンとして生活をおくっていた。

そんな私がどうして陸上部などのスポーツ系の部に入らず製菓部という部活に入ったのだろう。

あのとき私が堀川さんと一緒に部活見学をしたときのことを思い出す。

天野先輩を見てそれから先輩のことで頭がいっぱいで離れられなかったことがあった。

私は恋愛ということに関してはあまり知らないし、好きな子と一緒に遊んだりしたことはせいぜい小学校のときぐらいである。

やはり私は天野先輩に恋をしているのだろうか。

う　　嘘　　よね？

私は顔をカアツと赤面してしまう。

「どうしたんですか？顔が真っ赤ですよ。保健室に行きますか？」

「ふえ！？そ、そうね。熱があるかも　　。ちよつと保健室行って来ようかなあ」と私は保健室へは行かず、近くの洗面所へ向かう。

頭を冷やそうと顔を洗い、これからどうしようか考える。

## 部活動5 迷いの進路(後書き)

お久しぶりです、ゴキポンです。今度こそやるぞと思ったらもうあれから2ヶ月が経ってしまっているではありませんか。

月日が経つのは本当に早いものですねえ。

私も過去に部活を途中でやめたこともあるんですが、今思えばやっぱり続ければよかったなと思ったこともありました。

やっぱり、部活は続けるものだなと自分も思っております。

後ブログを作りました。

のURLです。

<http://blog.livedoor.jp/gokipon>

n /

気軽にご覧下さい (できたらコメントよろ!)

**部活動6 お詫びのクッキーと感謝を込めたクッキー（前書き）**

これからどうしようか一人で悩む白井真子であるが、その時彼女の目に映ったのはとある喫茶店。

彼女はしばらくその喫茶店を見つめ、考えそして、彼女がでた行動は。

## 部活動6 お詫びのクッキーと感謝を込めたクッキー

やがて放課後になり、結局なにも考えられなかった。

仕方なく私は部活に行かずにそのまま帰宅をする。

そういえば今朝お母さんに買い物を頼まれたのに気づいた私は町に寄った。

お母さんに買ってきてほしい物が書いてあるメモをポケットから取り出す。

買い物リストのメモを見てその店に行く。すると行く途中にある店が目に入った。「スイーツ・ライフ」という名前の喫茶店での辺りではおいしいという評判のお店であって、しかもそこでお菓子作りのレッスンも受ける事ができる。

私はその店に近づき、前にあるショーケースを見る。そこにはたくさんのお菓子が並んである。どれもおいしそうだ。どうやらこのお店で作った自家製のようだ。どおりで中からいい匂いがするわけだ。

私はしばらくそこに立ち止まる。

「  
」  
すると私は動き出し、買い物済ます前にその店に入る。

・午後8時26分・随分遅くなってしまったようだ。手には買い物したものを持ち、家に帰宅する。

「ただいまー！」

私の帰りを迎えてくれたのはお母さんだった。

「おかえり、真子遅かったじゃないの。どうしたの？」

「ああ、ちよつとね寄り道してしばらくそこにいてね。そしたらこんな時間になっちゃったの。そういえばご飯はどうしたの？」

「もう食べたわよ。あなたの分もあるから、早く着替えなさい」

「はい」

服を着替えようと自分の部屋へ向かう。すると、お母さんは私が手に持っている袋を見た。

「ねえ真子、あなたが持っているそれ何？」

「えっ、いや何でもないよ！じゃじゃあ着替えてくるね」

私は慌てて自分の部屋に入る。

危ないところだった。これは大事なものだから。

私が帰ってくるのが遅かった理由はこの小さな袋にあるのだ。

あるとき私は喫茶店「スイーツ・ライフ」に入った。

喫茶店に入ると、メイド服を着た店員が挨拶をしてきた。

「おかえりなさいませ、ご主人様」

「あ、あの入り口の前にあった貼紙を見たんですけど」

「お菓子作りのレッスンでございますね。ではこちらの用紙にお名前と住所、年齢、電話番号と後このメニューから作りたいものを選択してください」

メイドさんからメニューとレッスンの申し込み用紙を受け取り、記入をする。

「はい、かしこまりました！それではお部屋へのご案内しますご主人様」

メイドさんにお菓子作りのレッスンの会場を案内してくれた。

「こちらでございますご主人様。それではこのエプロンを着てください」メイドさんからエプロンを受け取るが、なんだろう。

これはエプロンというより、メイド服ではないか。

「あおう、すみません、これってメイド服では」

「はい、それはお料理をするときに着るクッキング用のメイド服ですご主人様」

仕方なく私はメイドエプロンを着ることにした。私はこういう服を着るのは初めてだから緊張しちゃうなあ。

「すごく似合ってますご主人様」

「あ、ありがとうございます」

なんか照れてしまいそうだ。

「それではご主人様の希望通りクッキーを作りましょう」

メイドさんの指示に従って準備をし、クッキーの作り方を教えてもらった。

それにしてもメイドさんってとても背が高いイメージがあるのだが、このメイドさんはあまり背が高くない。むしろ私とほぼ同じ身長である。同い年なのだろうか。何歳？と聞こうとしたけど、さすがにそれは向こうに対して失礼だなと思い自重をした。

「それではやってみてくださいご主人様」

「は、はい！」

しまった。考え事をしていたせいで全然説明を聞いていなかった。と、とにかくやらないと。

「ああだめですよご主人様！バターはクリーム状になるまで混ぜないとはいけません！」

「す すみません」

はあ、なんて恥ずかしいんだろう。私って製菓部の部員だよね？とはいってもあまり天野先輩から作り方をまだ一品も教えてもらってなかったっけ。

やはりこういうのはできるかできないかの差なのかもしれない。

クッキーは見た目簡単そうだったより難しいんだなと私は思った。

「いけませんご主人様、薄力粉をかけるには篩ふるいを使って掛けないとうまく混ざりませんよ！」

「ううすみません」

また失敗をした。私って今は一様「ご主人様」だよね？

その「ご主人様」がメイドさんに怒られるって全く想像がつかない。ただ想像がつくのは、その「ご主人様」がMで「メイドさん」がSとなればそれは成り立つと思う。

いや、それはありえないな。だめだだめだ、もうこんな妄想はやめにしよう。

そうすれば、まだメイド喫茶に行ったことがない人のイメージを崩してしまうことになる。

メイドさんとの個人レッスンは手取り足取り教えてもらい、およそ3時間近く続き、ようやくクッキーが完成した。

「お疲れ様ですご主人様」

目的が達成した後に見るメイドさんの笑顔がものすごく和んでしまう。これが噂に聞く「萌え」というのはこのことだったのか。

なるほど、確かにこれは女の私でも萌えてしまう。

クッキー作りで疲れた私はスイーツ・ライフでしばし休憩させてもらった。

「ご主人様の着ている制服は美紗姫学園ですか？」

「うん。もしかしてあなたも同じ学校の生徒？」

「いいえ、私は『美紗姫ヶ丘女学校』の生徒です」

「ああ、そこ知ってる。あの難関の女学校でしょ。やっぱり将来就職するの？」

「はい、私あまりお金を持っていないので公立の学校で今お勉強をしています」

彼女が言う「美紗姫ヶ丘女学校」とは公立の中では難関な女学校で勉強は難しいが、就職率は100%の学校である。

「じゃあ君、高校生なんだ」

「はい、高校1年生です」

「嘘！？私も1年生なの」

「まあそうなんです。奇遇ですね」

しばらく私は彼女とおしゃべりをしていた。

「おっと、お母さんに買い物頼まれていたんだ。そろそろ行くね」

「そうですか。とても楽しいお話をしてくださってありがとうございます」

彼女は私に向かって丁寧に礼をしてくれた。とても上品な子だなあ。

「いつてらっしやいませ、ご主人様」

私が出ると、それに続いて彼女も出てきて見送りまでしてくれた。とても高校生とは思えない人だった。

私は買い物済まし、喫茶店で作ったクッキーが入っている袋を手に持ち、帰宅したのだった。

翌朝、私は起床して学校の制服に着替えた。昨日のうちに準備をした教科書類と机の上に置いてある小さな袋を鞆に入れる。

「いつてきまあす！」

「ちよつと、朝ご飯はどうするの？」

「大丈夫コンビニに寄つてなにか買うから」

今日はやけに朝の目覚めが良い。

教室にはもう堀川さんがいた。

「真子ちゃんおはようございませす！」

「堀川さんおはよう！」

「どうしたんですか？真子ちゃん今朝から元気ですねえ。なにか良いことでもあつたんですかあ？」

「堀川さん、私頑張るからね！」

「え？あ、はい　頑張ってください」

堀川さんはなんのことも全く理解ができなかった。

今日の私はかなり気合が入っている。放課後私は製菓部の部室へ行くことを決心した。ああ、早く放課後にならないかな。

とても長い6時間の授業がようやく終わり、私は急いで製菓部の部室へ行った。

部室の扉をノックをする。

「し、失礼します！」

部室には天野先輩がいた。

「白井さん」

「あ、天野先輩。その　ごめんなさい！」

「えっ？」



「うん。いいよ」

私は天野先輩と一緒にお互いにもらったクッキーを食べ合った。私を作ったのと天野先輩が作ったクッキーと味の違いが激しいくらい分かりやすかった。でも天野先輩が作ってくれたクッキーはとても優しい味がしていた。

天野先輩から事情を聞くと、どうやらいつも忙しかったのは、私にあげるお菓子はどんなものによいか考えていて、それを見られたくないために私を部室から追い出したり、先に帰ったりしていたそうだった。

もう少し優しくしてくれたりすることはできなかったのだろうか。  
そう今日の放課後までに退部届を提出する期限がきたのだ。

「よくなりましたねえ白井さん。とうとうやめる決心をついたのですね?」

「教頭先生! その件なんですけど」と私は制服のポケットから退部届を取り出した。

「?」

突然教頭先生の前で退部届をビリビリッと破いた。

「なっ! 何の真似ですか白井さん!? あなたは自分が一体何をしているのか分かっていいるのですか!」

「はい、教頭先生。見ての通りこれが私の答えです!」

「ほほう。ようやく退学する気になったということですね」

「違います。退学は絶対しませんし、退部もしません!」

そう、これが私の出した答えなのだ。その自分で選んだ部活をやり続けると何か良いことが起きるということを教えてもらった高橋先生にも後でお礼を言った。

こうして私は再び製菓部という場所に戻って来れたのだ。

「よかったですね真子ちゃん! 無事に部活に戻れて」

「うん、ありがとね堀川さん」

「後、天野先輩と仲直りもできたしよかったですねえ」

「ちちち違つよ！あれは先輩に謝っただけなんだから！」

堀川さんは本当に私をからかうのが好きみたいだ。

「部活にも戻つてこれたし、これも堀川さんのおかげだよ。ありがとうね」

「いえいえ私はそんな大したことはしていませんよ。まあでも真子ちゃんが部活に戻れて本当嬉しいのです」

「ねえ堀川さん。今度からルミちゃんって呼んでもいい？」

「えっ、名前で読んでくれるのですか！？」

「うん。もう私たち決行仲がいいからね」

「ありがとうございます！私友達から名前で呼ばれるの初めてですう！」

堀川さんは私の前でかなりの号泣をする。よほど嬉しかったのだろつ。

これでまた私と堀川さんとの友情がまた少し大きくなってきたかもしれない。

## 部活動6 お詫びのクッキーと感謝を込めたクッキー（後書き）

ようやくこのお話にお菓子が登場しましたね（^| ^）

実は私もお菓子を作るの大好きでたまに自腹で材料費を出して、それで作ったりしています。

これがまた面白くてたまりませんw

さて、無事白井真子は製菓部に帰還したことにより、次回から再び部活動が行われるわけです。

是非とも、白井真子の活躍とツンデレぶりを温かい目で見守ってください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5442n/>

---

春菓愁糖

2010年12月30日13時40分発行